

## **段ボールコンポストの手順について**

### **I はじめに、段ボールコンポストとは、どういう原理のものか**

1. ダンボールコンポストの原理は、水と空気と微生物による有機物の分解です。自然の森の循環の原理です。落ち葉や倒木や生き物が死んで土になって行く原理を段ボールで再現したものです。
  - その自然循環の状態を、段ボールの中をかき回すことと、人の手で水分調整することにより微生物の活動をスピードアップさせ、生ごみの分解を進めます。

### **II 次に、段ボールコンポストのセットについて**

2. 材料の確認。段ボール箱（組み立てて使います。）不織布（虫よけ用で、家で布やTシャツに変えてもらってもいいです。）・ゴム・温度計・シャベル・基材・米ぬか  
基材は微生物の住処になるように調整されています。（おがくず、ピートモス、クンタン、腐葉土など）
  - ご自宅で用意していただきたいものは、ガムテープ、底上げ用の木材やスノコなどです。
3. 段ボールは折り返しを外側に折りたたみガムテープで止めます。底もガムテープで止めます。
  - ガムテープでしっかり目張りすることで虫の侵入を防ぎます。
  - 中の基材が一杯になった場合、折りたたんだ部分を立てて、ガムテープで止めてください。
4. 段ボールの底には底の補強のため段ボールを敷いてください。基材を段ボールの7分目入れます。米ぬかカップ2杯、水カップ2杯を加えよくかき混ぜます。
5. 段ボールは部屋に置く事も可能ですが、雨のあたらない、軒下などでもいいです。
  - 外に置く場合は特に虫の侵入に気をつけてください。家の中に置いた方が虫は出にくいですが、ニオイが気になるかもしれません。
6. 下には、床から浮く様にスノコや棒を2～3本置いてください。
  - 段ボールを浮かし、通気を良くすることで底が湿気ません。
7. 段ボールには防虫カバーとして、不織布をゴムひもで隙間なく、きっちりと止めます。
  - ここに隙間があると虫が入り卵を産みつけます。

### **III それでは次に、ごみの入れ方について説明いたします。**

8. 1回の生ごみを入れる量は最初はおおよそ500グラムです。三角コーナー1杯が目安です。
9. 生ごみは何でも入れられます。魚のアラやスイカの皮などは小さくした方が分解が早いです。
  - 生ごみを入れたら良くかき回し、空気を入れる事が大切です。
  - 魚は臭いが出るので、お湯をかけてから入れると臭いが抑えられます。
10. 40度ぐらいまで温度が上がり、状態がよく成ると、1日1キロまで入れられるようになります。
11. 隔ずみまで毎日かき回した方が、良い状態になります。
12. 熱を計測します。最初は温度は上がりませんが、1,2週間すると段々上がってきます。

#### Ⅳ 段ボールコンポストについて、よくある質問と注意事項をお伝えします。

##### ア) 温度について

13. 20度前後でも分解はゆっくり進んでいます。冬場などは二重の箱にすると丈夫になります。
- 一回り大きめのダンボールに入れたりすると保温性が増します。あまりに温度が低くなると微生物の活動は停止します。
14. 普通は30度から40度を上がり下がります。
15. 分解を早めるためには温度を上げます。米ぬか、廃油、納豆、糖類などを入れて、水分を60%にします。
16. 温度が上がると臭いがでる場合もありますので注意してください。
17. 月に1回くらい60度まで温度を上げると虫の発生が抑えられます。

##### イ) 次に水分について

18. 水分量は60%が良い状態です。手で握り水が出ないで、崩れるぐらいの状態です。
19. 入れる生ごみが乾いていると、水分が不足になることがあります。その時は水を足します。
- 水分が不足すると微生物が活動できません。
20. 水分が多すぎると臭いが出ることがあります。
- 空気不足になって、腐敗してしまいます。
21. 水分が多くなってきたら、米ぬかや基材を加えてください。
- 温度を上げて水分を飛ばすこともできます。

##### ウ) その他、こんな時は慌てないでください。

22. 白いカビが表面に出た場合、良い状態なので、かき回してやります。
23. しばらく使わなかった場合、生ごみや水や米ぬかを加え、よくかき混ぜれば再開できます。
- 休眠状態から目覚めさせるイメージです。

##### エ) 基材交換の時期について

24. 投入生ごみの総量が、60キロから100キロになると、発酵が止まります。基材の交換時期です。コンポスト総量が重くなって、密度が濃い感じになります。固まったまが出来、粘った感じになります。また、段ボールが湿気で段々弱くなります。新しい段ボール箱に変えてください。
25. 終了した基材は、堆肥として鉢やプランターの下部に入れて、野菜栽培の肥料になります。
26. 堆肥はできるだけ、各家庭で利用してください。どうしても使えない人は、ビニール袋に入れて、堆肥と書いて、月一回の資源ごみの蛍光灯などの日に出してください。
27. 更新は、新しいダンボール箱にできた堆肥を4分の1ほど入れ、そこに新しい基材を足して再開します。
28. 大家族の場合、また、場所があれば箱を2つ用意して行うのも良いと思います。
29. 原理がわかれば段ボール箱にこだわらなくても、又中に入れる基材もおがくずだけとか、自分なりに工夫が出来ます。